

## 熊本県益城町、機械化のアップデートが進む中川農園

ニンジン

## 「冬ちあき」への期待と評価

(編集部)



地域概況

全国屈指の農産物生産基地である熊本県は、野菜、畜産、果樹、お茶、い草、花きの栽培が盛んで気候条件にすぐれた地域です。益城町は熊本県のほぼ中央部に位置し、野菜を主体とした多品目の農業が盛んで、早出しのスイカなどが知られています。



↑健全な葉を保つ中川農園の「冬ちあき」。

昨年から冬どりに「冬ちあき(TCH・799)」を導入された有有限会社中川農園さんは、中川敏夫さん、喜代子さん夫妻を中心に正社員、パートさんを含め20名ほどが働く農業法人です。何でも相談しやすい喜代子さんの采配で、子育て中の従業員には希望する時間に沿ったシフトが生まれ、家族的で働きやすい職場環境が整っています。

栽培の中心は露地ニンジンです。秋冬作が18ha、春のトンネル作が16ha、そのほか早出し用には高冷地の飛び地で作付けもあります。ニンジン以外では春にジャガイモ、夏にハウスナスが4棟で、冬のニンジンと並行しサトイモも栽培されています。出荷は関西方面が契約中心で、契約を満たすため予備として作付けした余剰分は、市場出しもされます。

秋冬どりの播種は7月下旬から8月末までの40日間で済ませ、使用する6品種の早晩で11月～3月まで約5カ月

間の収穫につなげていきます。年明けから春ニンジンにつながる3月収穫までは「優馬」を主力とされています。その理由は、冬の寒さが厳しい益城町でも、葉が丈夫で機械収穫がしやすいためです。

新品種の「冬ちあき」はそろいや歩どまりがよく、根形は尻づまりにすぐれた円筒形で多収。12月～2月どりに適しています。見た目も肌つやがあり、色味も濃く、見ばえがします。根形について中川社長に伺うと「逆三角形が主流だったので、気にする出荷先もありましたが、生産者側は箱数が出るので助かります。色味はひと目で違いが分かるほど濃くなりました」。厳寒期に必要なとされる葉の強さに関しては、「優馬」よりは劣るものの機械収穫に支障はなかったそうです。これまで厳寒期収穫に向く品種が「優馬」しかなくリスタがあったため、「冬ちあき」との併用を検討されています。

現在42歳の中川社長は18歳で就農し、ニンジン栽培を始められました。中川社長の栽培の特徴は、元肥は有機肥料を主体にぼかし肥料や米ぬかを使用し、生育を見ながら葉面散布などで年内に葉をかたく締めながらしっかりと作ることです。

葉面散布など、手のかかる作業を可能にしているのは一貫した機械化のアップデートです。大型の収穫機や最新





↑フレコンで運ばれたニンジンが荒洗いで泥が落とされる。



↑3段階にブラシを変え汚れが残らないよう表面をていねいに洗浄。



↑きれいになったニンジンは右手奥、カメラセンサーによって形状選別されていく。



↑中川さんは5000~7000倍に希釈した「ペンタキープ」を葉面散布で使用。天候不良時でも光合成を促進させる効果があるという。



↑収穫した「冬ちあき」を手にした中川農園代表敏夫さん、42歳。父の代から始めたニンジン経営の機械化を計画的に進めてきた。



↑そろいがよい「冬ちあき」。



↑「フォスピットK」は本葉4~5枚以降に10日間隔で使用。前半は葉が暴れないように、後半は寒くなっていき太らしたいタイミングで肥大を促す。

のカメラセンサーによる選果機を導入し、毎日稼働していた選果機を週3日稼働で処理できるようになりました。余裕ができた時間を、除草や葉面散布など栽培管理に回すことで、ニンジンの品質も向上しているそうです。

「ニンジンには機械化が進んだ品目です。投資できるだけ価格も安定しています。20年前に北海道のニンジン産地で見た大型収穫機を、ようやく自分でも使えるところまでできました」と感慨もひとしお。機械化の目的は、選果レベルの高い他県のニンジンに市場負けしないように、という思いもありました。

葉面散布には「ペンタキープHyper 5000」を活用、極端な天候不良、雨続きの曇天時にも光合成を高める作用があり、秋冬どりの年内収穫分で施用したところ、収量に結びついたそうです。亜リン酸資材の「フォスピットK」

## タキイ熊本研究農場でJA菊池人参部会様と現地検討会を実施 ～期待が高まる「冬ちあき」～

本年2月7日、タキイ熊本研究農場(熊本県菊陽町)にて、JA菊池人参部会の方々をお招きし「冬ちあき」の現地検討会を開催いたしました。同部会は約60名の方が所属し、秋冬どり112ha、春どり55haの作付面積があります。当日は、収穫繁忙期にかかわらず30名の方に来場いただき、農場で栽培した「冬ちあき」の地上部や収穫物を現地慣行品種と見比べていただきました。

「冬ちあき」は部会役員の方を中心に、主に年明けどりで3年前から試験いただき評価も上々です。JA菊池営農部園芸課南営農センタ

一の広域指導員・西淳史さんからは、「葉が比較的コンパクトで、TCH-711(現地限定品種)より耐寒性にすぐれ機械収穫しやすく、そ

ろいもよいと好評なので、年明けどり品種として、部会の選択肢に考えたい品種です」と注目していただきました。



も葉の生育を見ながら使われており、根張りが向上し、曇天続きや高温期にも健全さを保てたようです。「風雨で倒れないようリン酸を効かし葉が暴れないよう節間を詰めています」。

機械化に加え、笑顔を絶やさない奥

さまの喜代子さんや従業員さんのチームワークで栽培に時間と手間をかけられるようになったのではないのでしょうか。中川農園さんのワークライフバランス向上に「冬ちあき」の果たす役割は少なくありません。

※文中で紹介した資材はタキイ通販で取扱いがないものもございます。ご了承ください。